

てることから明らかである。『エチカ』第三部定理一八備考二と第三部諸感情の定義一三で「恐怖」の定義が示されているのだが、そこで恐怖は疑わしいものの像から生じる変わりやすい悲しみとされている。したがって明晰には知っていないことに対面することで恐怖がかき立てられるのだ。また「像(imago)」も認識の不確かさに通じる言葉であり、なぜなら人間が誤謬に陥る認識は「想像力(imaginatio)」による認識の他にはありえないからである。

自然的原因についての無知が人々の精神のうちで恐怖をかき立て、その恐怖から免れるために目的因を空想してしまう。この場合、人間は迷信に囚われていると見做される。そして自然的原因が分からない出来事を神の業とし神の意志による結果であると空想したとき、人間はその出来事を「奇跡」と呼ぶ。このとき、無知には自然的原因に対する無知と目的因としての神の意志に対する無知がある。前者によって人間は恐怖をかき立てられ迷信に囚われてしまう。そしてこの無知をきっかけとして、後者の無知に惑わされた人は説明できない出来事を奇跡と呼ぶ。奇跡は自然的原因に対する無知を神の意志という別の知らないことで補おうとする空想である。したがって人間はその把握力の限界により無知から免れることはできないが、安易な想像によって判断しなければ「無知としての奇跡」という誤りに陥ることはない。

デウスからナトゥーラへ

——スピノザと十七世紀の改革派神学——

加藤 喜之

なぜ今、スピノザを問うのか。これは、十七世紀の過ぎ去りし初期啓蒙の問題ではないのだろうか。そして、啓蒙の問題は、ポストモダン哲学によって、超克された古くさいものではないのだろうか。現代の思想家や歴史家たちは、これらの問いに否と答える。ポストモダンと呼ばれる知的潮流がゆるやかになったいま、通奏低音として十七世紀末以降、現代まで響き渡る「近代」というものの問いなおしがなされている。歴史家たちによる「ラディカルな啓蒙主義」という知的試みもその一環である。これは、スピノザの思想がフランス革命につながる徹底的なデモクラシー運動の理論的支柱であったと論じるものである。

また、哲学の分野においても、アルチュセールやドルウーズ以降、マテリアリストとしてのスピノザへの注目があり、乗り越えられるべき重要な問題としてスラヴォイ・ジジエクやアラ・バデウなども、論駁を試みている。英米の分析哲学の分野においても注目を集めており、脳科学とスピノザの形而上学を調和させる試みなどもみられる。

このような一連の流れは、ポストモダニストたちが豪語したような近代の超克が、それほど簡単には、成し遂げられていないことを示している。教科書的な時代区分を超えた重要な問題が、十七世紀にデカルトやスピノザによってはじめられたプロジェクトには、実は、まだ残っているのではないだろうか。

また、宗教学や神学の分野においても、スピノザはある意味、大きな分水嶺である。人間理性に理解不可能な分野をなくし、神の知識を質的ではなく量的な問題に変換することに成功した。つまり、無限な神の存在は、前近代までのように、まったくもって人間理性には把握できない事象ではなく、時間と絶え間ない努力によって、その知識を増やしていくことが可能となった。非合理的な事象は、合理的な説明が可能となり、いつさいの存在は人間知性のうちにとりこまれることになった。このような思考的方法論の大きな基を創出したのは、スピノザである。

もうひとつの「何故」もいま問われるべきであろう。では、何故、十七世紀の改革派神学なのだろうか。本研究の目的は、古くさい神学的正統主義を、復活させることではない。デカルトやスピノザが提唱した人間理性によって理解可能になった自然とも呼ばれる神は、近代以前のキリスト教的神論に依るところが大きく、単純なる回帰は近代思想が指摘した問題点をいっさい無視することになり、知的な真剣味にかける。

むしろ、十七世紀のプロテスタント主義の一翼であった改革派神学を鑑みる理由は、デカルトやスピノザの思想が、ネーデルラントの改革派の人々に、最初に熱意を持って読まれ、同時に、この新しい哲学の最初の反対者となったからである。そして、同時代人であるからゆえに、近代的思考が自明の理になるにつれて、覆い隠されてしまった問題を、この神学・哲学者たちは見いだしていたからである。彼らの解答は、現代的には使えないものである。しかし、彼らの問いかけは、歴史的にみて

も、思想的にみても興味深いものがある。ゆえに、本研究では、改革派哲学者であるゲルハルト・デ・フリースのデカルト・スピノザ主義への反駁をみながら、彼の提示した近代の問題点と、いつさいを超越する神を思考する可能性を探っていく。

第一部では、スピノザの神概念について論じていく。第二部では、デ・フリースのデカルト・スピノザ哲学に対する反駁を論じていく。そして、最後に、神に関する近代的思考の限界と、それを超えていく可能性を、ジャン＝リュック・マリオンの『存在なき神』と初期カール・バルトの『ローマ書講解』を用いて、示していく。

カント哲学における信仰の概念

南 翔一朗

カントは『純粋理性批判』の第二部第二章第三節「臆見、知識、信仰について」と題された部分において、信仰とその意味について、確信 (*Überzeugung*) や思い込み (*Überredung*)、また臆見 (*Meinen, Meinung*) および知識 (*Wissen*) との関係から考察するのであるが、この部分には概念定義上、少々問題が含まれている。

その問題とは、カントが「〈真とみなすこと〉 (*Fürwahrhalten*) が理性をもつすべての人に妥当するなら、その〈真とみなすこと〉の根拠は客観的に十分であり、その場合、〈真とみなすこと〉は確信 (*Überzeugung*) と呼ばれる。〈真とみなすこと〉がたんに主体の特別な性質の中にのみその根拠を持っているなら、それは思い込み (*Überredung*) と呼ばれる」と述べ